

大和文華館の四季(その3)

大和文華館館長 石澤正男



やまぼうし



山百合



笹百合

この頃毎朝、正門から小砂利の敷かれた坂道を館の方へ向って、左右を眺めながらゆっくり歩いて行きますと清々しい樹々の新緑が日一日と色調を変えてゆくのがよくわかります。5月に入っても中々新芽を出さずにいた南京櫛(なんきんはぜ)や合歡木(ねむのき)も今ではすっかり若葉がそろってきました。これも新芽を暫く忘れていたように見えた梅檀(せんだん)がいつの間にか淡紫の花房を一杯つけています。初めは緑色で人目をひかないやまぼうしの花(実は苞)がもう真白になって風にゆれています。道端には月見草も咲き、にっこりきすげもこの間から咲いています。これは一昨年理学博士の吉年(よどし)先生からいろいろ種類の変わった珍しい萱草と一緒に頂戴したもので、幸い地味に合ったと見え、よく育ち、これから夏中われわれを楽しませてくれます。

厳しい寒さに耐えてきた樹々の蕾が、つぎつぎと咲き競う春の花は、われわれに生きている喜びを力強く与えてくれますが、しかしまた一方では応接に遑のないといった、心の慌しさを感じさせることも否定できません。桜を中心とする花時の騒がしさが過ぎて、新緑の季節になると、いつも私はなんとなくほっとした気持ちになります。ことに晩春のある晴れた暖い日に、思いがけなく松蟬(はるぜみともいいます)の、まのびした、睡気を誘うような声を耳にしますと、春の慌しさがその瞬間に消え去ってゆき、清々しい初夏の到来を肌を感じるような気がします。

今年始めて松蟬を聞いたのは4月28日でした。大体例年並でした。この蟬は夏の蟬とは違って決して毎日は鳴きません。中々気むずかしやと見え、よく晴れて暖く、風も穏やかな日でないとう鳴かないようです。松蟬の好きな条件の揃った日には松林のあちらこちらからこの蟬特有ののどかな声が聞こえてきます。梅雨時にも雨の晴れ間には鳴きますが、ニイニイ蟬の出る7月初旬にはもう聞かれませんが、毎年この蟬の声を聞くのを楽しみにしているのですが、ついぞその姿を見たことはありません。ひぐらしに似ていると書物には書いてありますが、実際に見る機会はとてもなさそうです。

この号では夏の**大和文華館**の風物をお伝えする予定ですが、つい話が晩春の方へ逆戻りしてまいりました。松蟬の序に音の世界に耳を向けてみますと、なんととっても美声の第一は**ほおじろ**です。春から夏にかけて小鳥はみんな営巣に忙しい季節ですが、この季節はまた小鳥の啼声を鑑賞するのに最適の時です。**ほおじろ**は**きじばと**、**ひよどり**、**こじゆけい**、**かわらひわな**と同様一年中この辺にいる留鳥の一つですが、雄はよく高い梢の上にとまって長く余韻に富んだ啼声をきかせています。かわらひわも愛すべき声の持主で、いつも松林のどこかで囀っています。うぐいすは7月頃まできかれます。美声組とは対照的なのが、**こじゆけい**と**ひよどり**で、この2つは小鳥の騒音組のトップ・クラスに挙げてよさそうです。どちらも未明から日没まで頓狂な大声をあげて

飛びまわっています。6月には南方からおよしきり、**かっこう**、**ほととぎす**なぞが日本に渡ってきますが、この数年来観察したところでは、どうもこれらの夏鳥はこの辺には住みつきません。時にはおおよしきりが蛙股池の葦叢に数日留って啼いていましたが、いつのまにかどこかへ行ってしまいました。一昨年はほととぎすが2週間も続けて啼いているので、珍らしく住みつくかと思いましたが、その後やはりどこかへ行ってしまいました。小鳥のほかに鳴く虫のことも書くとよいのですが、それはこの次の号に譲りましょう。

今咲いている夏の花は**うづぎ**(卯の花)、**箱根うづぎ**(白い花が日がたつにつれ赤紫に変わります。それで源平うづぎともいわれます)、**梅檀**なぞが主なところですが、6月に入ると**笹百合**がピンクの可憐な花を咲かせます。昔は近畿の山野では、どこでも見られたそうですが、濫獲されてしまい、**大和文華館**で見られる群落は今では貴重なものとなりました。笹百合の花は6月一杯ですが、続いて夢みるような**合歡**の花と鮮紅の**柘榴**(ざくろ)が咲き始めます。7月から8月にかけては松林の中に広く点在している純白で大輪の豪華な**山百合**の花が暑さを忘れさせてくれます。その頃には芙蓉も花盛りとなり、早咲きの萩も咲き出し、路傍には**河原撫子**(かわらなでしこ)、**みやこ草**、**われもこ**うなぞも皆様の目にとまるでしょう。(松林には蛇が多く、ことにまむしがいますからご注意下さい) 5月24日誌。

季刊 美のたより No.21

昭和47年7月1日

発行 大和文華館